

「平頂山事件」考

(撫順会会員) 小林 実

——過而不改，是謂過矣。—— 論語（衛靈公）

はじめに

昭和46年8月から、朝日新聞紙上に連載された本多勝一記者の中国ルポ『中国の旅』は、満州事変から日中戦争へと拡大された日中戦争のなかでの日本軍の残虐行為を現地中国で取材し、明らかにしたものととして、読者に大きな衝撃をあたえた。

この『中国の旅』のなかで、ベトナム戦争のなかで米軍がひき起した「ソンミ事件」になぞらえて報告されたのが、「平頂山事件」（以下「事件」と略記）である（『中国研究月報』昭和57年3月号、「東北地区の二つの記念館」野間清，参照）。

「事件」は、『中国の旅』によると、昭和7年9月、満鉄経営の撫順炭砦を抗日ゲリラが襲撃し、人的にも炭砦施設にも大きな損害を与えた。撫順を防備していた日本軍守備隊は、これに対し「通匪者」に対する処罪，報復を口実にして、直接事件に関係のない撫順近郊平頂山村の全村民，老若男女合せて3000名を虐殺してしまった，と紹介されている。

「抗日ゲリラの撫順襲撃」「日本軍守備隊の平頂山村への出撃」の2点は誰もが否定し得ない事実なのだが，発生直後に「事件」そのものを抹殺するのに近い隠蔽が日本側の手によっておこなわれたので，真相の解明は非常にむずかしい。

一方の当事者「中国」でも，現在では，日本側の事件資料がほとんど全く公開されていない状態なので，「事件」の「記録」は推論を含めた部分が各所にみられる。このこと自体，新しい資料の発掘があれば訂正したり挿入したりすればよいと思うが，『中国の旅』は，中国側からの取材のみ

で発表されているので，考証に若干手落ちがあつて，労作でありながら裏付けがされていない弱さがあちらこちらにみられ（事実関係の不明確さ，数値のあやふやさ等），現在では，「南京事件（南京大虐殺）」同様，「まぼろし派（「事件」は中国のデマ宣伝であり幻だ，とする人々）」を生む結果となっている。

本年5月，旬刊『世界と日本』誌は，特集「平頂山事件疑義」なる記事を掲載している。筆者は「長谷川潤」，現職の中学校教諭とある。

＜『中国の旅』は，多くの日本国民に，昭和7年当時における，日本軍による中国民間人3000名の，大虐殺なる作り話を信じ込ませた。（中略）これは「幻」であった事件が，明らかになりつつある「南京大虐殺」を，あくまでも「あった」と主張するために，この「平頂山事件」なる日本軍の虐殺行為が，是非とも必要になって来るからである。（中略）この意図的な反日宣伝攻勢に対し，将来の日本のためにも，歴史的事実を明確にしなければならない。＞

これだけでもこの文章の筆者の姿勢，意図がよくわかるが，さらに筆者は続けて『中国の旅』は，全文にわたり「矛盾」と「独断」で「事件」を組立てているとし，次のように言う。

＜平頂山の村民の多くは，日帝支配の撫順炭砦に勤め，日本の満州支配に奉仕していたのである。数時間前まで血を浴びて戦っていた漢族ゲリラの兵士たちにとって，自分たちの仲間を数多く戦死傷させた日本側に奉仕する平和な村落をまのあたりにして，民族の裏切者たちに対する怒りと報復の念を爆発させたとしても不思議はない。地方軍閥の兵隊はヤクザ以下に見ら

れるほど、質の低い連中が多かった当時である。老若男女を問わずに、手当たり次第、殺しまくり、奪いまくったのであろう。その虐殺行為は、日本側に協力する者への警告として、意図的に実行されたかもしれない。いずれにしても推測の域は出ないが、情況から考えて、日本軍の虐殺説には無理があり、中国側が実行したものとすれば、すべての脈絡が合うのである。＞

つまり、平頂山の惨劇の実行者は日本軍ではなく、炭砒襲撃の抗日ゲリラ自身であって、「日本軍の虐殺行為は幻」であると結論している。

こうした類のレポートは他にもいくつかあり、それこそが「幻」であり、意図的な「スリ変え」であることが、少し調べればすぐにわかるのだが、この「事件」についてこれまでに発表された「記録」には、残念ながら「幻論」が出廻ってくる素地がある。

「事件」解明の資料が乏しく、現代史家の実証的追究もなく、憶測によって語られることが多い、といった理由からだ。歴史の事実を後世がどう受けとめるか、意見の分れるところとしても、真相を追究することに誰も否やはあるまい。

戦後、「事件」関係者として炭砒職員7名が処刑（昭和23年4月）された。この7名を「事件」の「首謀者」とする裁判⁽¹⁾には、多くの疑問があって、その追究を撫順関係者の手で始めた。昭和57年春から始めた裁判調査において、避けて通ることができないのが「事件」の解明である。今日まで続けているのだが、まだまだ分からぬことが多い。

このレポートは昭和59年12月、関係者に配布した『平頂山事件調査（中間）報告』を下敷にしている。紙数の都合でその全文を紹介できないが、「幻論」が一つでも消えてくれればと希う。

資料、文献等から原文のまま引用する場合は＜＞でくくった。文中では敬称を略させて

いただいた。証言者の固有名詞は、現在では本人の希望等もあって、明らかに出来ないものもある。参考資料、文献等は一括表記するが、文中では出典を略している場合がある。

反満抗日運動の概況（昭和7年）

昭和7年3月の満洲国建国以後、全満洲の治安「肅正」が急務とされたのは、専ら、反満抗日の抵抗運動が、予想をはるかに上まわる厳しさであったことによることは言うまでもない。当時、満鉄は情勢を次のように分析している。

＜満洲事変前に於ける満洲の匪賊⁽²⁾総数は、一般に2万乃至5～6万と称せられた。然るに事変以後には、その規模の大（昭和7年夏に於ける全満洲の兵匪総数は、実に30万という驚くべき数字を示した）、横行範囲の広さ、武装の完備等、従来と全く比較し得ないものになった。其の原因としては

- (1)事変に因る敗兵の大部隊が武装のまま殆ど全部匪賊化したこと。
- (2)地方的警備機関が消滅したこと。
- (3)張学良政府より武器弾薬の支給を受けた義勇隊が出現したこと。

を主たるものとして挙げ得る。＞

そして、緊急措置を次のように決定している。

＜最早、姑息なる手段を以てしては、到底如何ともなし難き状態に立ち至ったため、会社（満鉄）は警備の充実に差当り、必要なる緊急措置を現場機関に一任して、その金額を問はず、事後承認すべきことを予め允許した。斯る措置は会社会計制度上未曾有のことに属した。＞

昭和7年に満鉄がこの緊急措置に支出した総額は、145万3000円にのぼった。

全満で「兵匪」が猖獗を極めたのは、昭和9年から11年にかけてであるが、7年度においても

出現匪回数……………3816回

出現匪延数………3377万4184人

と当時の軍政部統計表にある。

出現匪回数3816回というのは、一年365日毎日どこかで10ヶ所以上が襲撃を受けているというかなりの頻度であり、特に東辺道⁽³⁾を横断する瀋海沿線を守備のテリトリーにもつ撫順駐屯守備隊（独立歩兵第2大隊第2中隊⁽⁴⁾）はその頃、日夜を分かたぬ出撃を余儀なくされていた。（満洲建国直後の頃、東辺道における匪数は大小の集団を合せて16万を算した。森崎実『東辺道』）

当時「匪賊」の巢窟といわれた東辺道を隣接県にもつ撫順では、常に匪襲の不安はあったものの、実際には市街地（満鉄付属地）への襲撃はなく、一応の治安は保たれていた。

7年4月、唐聚伍⁽⁵⁾が桓仁県で兵を挙げ、日満軍を駆逐して通化一帯を完全に占領する事件（通化事件）が起きた。

唐聚伍は、東辺道の行政権をも手中におさめ（軍票を発行し、各県知事を任命し、兵工廠、被服廠、幹部養成所等を設置していた）、通化に総司令部（遼寧民衆自衛軍 総司令唐聚伍 副司令王鳳閣⁽⁶⁾）を置き、この地を反満抗日、失地回復運動の一大拠点にすることに成功していた。

「遼寧民衆自衛軍（以下「自衛軍」）」は、32路編成で、そのうちの第6路（司令季春潤⁽⁷⁾）、第11路（司令王彫軒⁽⁸⁾、軍団長梁錫夫⁽⁹⁾、兵力約2000）の2部隊が後日撫順に進撃して来たのである。

当時、撫順では前記の「独立守備第2大隊」（隊長川上大尉⁽¹⁰⁾、兵力約200）が防備の任にあたっていた。

7年8月、高粱の繁茂期にはいると「自衛軍」の動きが活発になり、撫順守備隊はそれこそ休む間もない対応を余儀なくさせられだしていた。

満洲事変勃発1周年（9月18日）を期して、「撫順襲撃」の情報が頻々として日本側に入って来たのもこの頃のことである。

そうしたなかで、撫順警備陣を震駭させる事件

が起きた。

満洲国撫順県公安隊（日本人指導官以外は中国人で編成）が、「自衛軍」が撫順を襲撃する場合、これに内部から呼応し、一斉蜂起をする計画を立てていたもので、8月末、公安隊の一部が日系指導官を拉致し、第6路司令部に投降したことから、陰謀が発覚した。

日本の警備陣にとっては、外部からの襲撃はもとより、撫順内部の中国人（当時の撫順人口、日本人約1万8000人、中国人約4万4000人）が、動乱時にどのような動きをするかが、全く予想の出来ない頭痛の種であっただけに、この事件は警備陣の神経をいやが上にも高ぶらせた。

9月にはいって、「自衛軍」撫順に向け進撃中の報に接した守備隊は、大東州方面を偵察すべく、佐藤軍曹を長とする騎馬斥候隊を出発させた。しかし佐藤隊は撫順東南12キロの地点で、「自衛軍」に四方を完全に包囲され、戦死1名、負傷2名を出し、隊長の佐藤軍曹は負傷したまま撫順県の東方、新賓県馬孤山榆林済の自衛軍「李春潤司令部」に連行され、乗馬もろとも惨殺、曝しものにされるという不名誉をおこしてしまった。この出来事は、撫順守備隊隊員に「自衛軍」憎しの敵愾心を増幅させることになったと推察できる。

この「自衛軍」を追撃、出動したのが守備隊の川上大尉であり、井上中尉⁽¹¹⁾であった。

井上中尉は、後日、平頂山村で村民虐殺の直接指揮をとった人物なので、少しふれておこう。

井上中尉はもともと第4師団歩兵第37連隊に属し、満洲事変に際して、錦州攻略戦に参加するため6年12月満洲に「出征」してきた。「出征」前日、新婚間もない妻千代子が「お国の御ために思う存分の働きを遊ばして下さい」との遺書を残して自刃したという異常な体験の持ち主で、軍国美談として大きく報道もされていた。日頃から「妻の分までうんと働くんだ」ともらしており、軍務には非常に厳格であったという。

「自衛軍」が、いつ頃撫順襲撃を計画したのかはさだかではないが、密偵多数を撫順に潜入させたり、公安隊の寝返りを画策したり等、事前の準備をかなりしているのをみても、行き当りバッタリの襲撃ではなかったと考えられる。(中国側の資料によれば、北平抗日救国会から、康悦枕、泰喜林を通化、新賓に派遣し、襲撃を具体的に研究し必要な指示を与えたとある。)

「自衛軍」は、第6路軍南札木、宮盤(瀋海線沿線)を、第11路軍は撫順を、それぞれ襲撃すべく新賓を出撃している。

9月にはいり、撫順市郊外に潜入した自衛軍は、昼間は山中にひそみ、夜になると襲撃準備を着々とすすめていた。撫順を包囲していたこの時の第11路軍の兵力は約2000であったという。

撫順を守っていた日本側守備隊は、

＜「独立守備隊第2大隊第2中隊」将校6，兵員4ヶ小隊約200，山砲1ヶ分隊，重機1ヶ分隊，軽機4ヶ分隊等を装備。「防備隊(在郷軍人で組織)」動員可能数，約650名，山砲，機銃，小銃，等を装備。他に警察官，約200名，憲兵若干。＞

と記録にある。

撫順を包囲していた第11路司令部は、部隊を三つに分け三方から撫順を襲撃する予定であった。

①東部襲撃隊(襲撃隊主力，搭連より撫順へ突入)

②中部襲撃隊(指揮梁錫夫，千金堡から進撃し，平頂山，栗家溝を抜いて，市の中央部に突入)

③西部襲撃隊(撫順西方より古城子を攻撃)しかし実際に撫順突入に成功したのは，梁錫夫の一隊と西部方面の一部だけであった。

9月15日，日本が正式に満洲国を承認した日の朝，当時の新聞は，

＜今日9月15日，帝国政府が列国にさきがけて，満洲国を正式に承認する日。極東平和のため記念すべき意義深き日＞＜この歓喜この感激，

世界的この喜びを満喫する満洲国民＞，全満洲は歓喜の渦，と報じている。

「自衛軍」は，この日を撫順襲撃と決めていた。襲撃の情報は日本側にも頻々とはいつていた。全防備隊員が召集され，撫順東部(搭連地区)に主力をおく防禦陣の配備がすべて終わったのは，午後9時頃であった。

「自衛軍」の来襲

久保孚炭砒次長⁽¹²⁾は防備隊の配置を終えた後，「自衛軍」の動きのないのをみて，この日の襲撃は無いと判断し，帰宅し就寝していた。『満洲日報』撫順支局，中村記者も，12時過ぎ撫順署を出て，支局に引きあげていた。

誰もがこの夜襲撃はないと思ひこむほど静かであった。仲秋節の祝酒をくみ交す人が多かったという。月明の夜は，何事もなく更けて行きそうにみえた。

中村記者が，突然パチパチと豆を煎るような銃声を聞いたのが午前1時5分。すぐ撫順署に駆け込み，三階バルコニーから南方を見ると，満鉄病院の彼方，楊柏堡の方面に猛烈な火の手があがっていた。この時すでに電話線は切断されていて，撫順と外部との連絡は絶ち切られていた。

梁錫夫が，隊を率いて五老屯付近の拠点を出発したのは午後11時頃で，千金堡を通過したのは，12時から12時30分の間だったと推定される。その時，平頂山村に隣接した山田牧場の主人が「匪襲」を察知したのだが，何分子供が8人もいて，その避難に手まどり通報が遅れた。「自衛軍」は平頂山村を通過すると，三方に分かれた。指向する目標は楊柏堡で，1隊は東郷採炭所を，他の隊は東ヶ丘，老虎台両採炭所を目指した⁽¹³⁾。

＜「自衛軍」は手に手に大刀や長い柄の槍を持ち，東南方向の千金堡から群をなしてやってきた。「進め！」「殺せ！」とその叫び声は天

に轟いた。先鋒部隊は、平頂山に着くと村民を呼び起こして、外で声援を送ることを命じた。しかし、多くの村民は、初めて見る「自衛軍」に怖くなり、家に隠れてしまった。(証言者楊占有⁽¹⁴⁾) >

被害の多かったのが、平頂山から一番近い楊柏堡採炭所であった。社宅の78家族約300人は、完全に寝込みを襲われ、南坑坑内への避難があと5分遅れていれば、全滅の危険さえあったという。

自衛軍側にも、この地区での戦死者が最も多い。それは、続くはずの後続部隊が途切れて、砦区深く奇襲に成功したものの、急を聞いて駆けつけた守備隊と防備隊に包囲される形となり、袋の中の鼠同様になってしまい、猛射を浴びる結果になったからのである。

もともと、撫順の東部と西部からの襲撃を予想していた日本警備隊は、予想しない地点からの襲撃に、不意を突かれた形になってしまった。しかし、自衛軍は互いの連絡が悪く、この一つの方面からだけの襲撃にとどまってしまった。戦闘は3時間ほどで終わった。

<……結局、孤軍で戦わざるをえなくなり、相当の死傷者を生んでしまった。このままで突撃を継続すれば、更に大きな損失をうけることになる。梁錫夫は撤退を決意した。(『平頂山惨案』中国側の資料)>

この襲撃で日本側が受けた損害は、次のとおりであった。

守備隊 重傷2名。炭砦側職員 殉職4名、重傷2名。社員家族 死亡1名、重傷2名。撫順在住の中国人については不明。

建物工作物供用品等の焼失損害 21万8,125円。

楊柏堡坑 約15日間作業停止。

東ヶ丘坑 工場及び運炭栈橋の焼失により能率低下、出炭減 5,100t。

東郷南坑 採炭停止。

東郷本坑 3日間作業停止。出炭減 3万t。
老虎台坑 数日間作業停止、工人の退散多数にのぼる。

「自衛軍」の損失、遺棄死体 約50, 捕虜3~9名。

(この戦闘についての資料は、日本側にも多く残っているが、ここでは省略する。ただ、襲撃は「まぼろし派」の多くの人達がいうような「ただの物盗り」や「不良の兵匪」によるものではなかったことを指摘しておきたい。)

平頂山村の惨劇

撫順は、わずか250名程度の一隊に、坑区のかなかを、思うがままにひっかき回された。

16日朝、警備隊幹部は対策を急いでいた。

于慶級⁽¹⁵⁾の供述証言

<9月16日朝6時頃、すべての自衛軍が撫順から撤退して、2時間ほど経過した頃、防禦隊の首脳数人が集まって、緊急会議を開いた。集まったのは、守備隊川上大尉、憲兵隊小川准尉、県公署山下参事官と私の4人であった。

川上大尉は「昨夜の大刀会匪の侵入は、栗家溝の分所からの通報で知らされた。沿道の各村村民は、匪賊の通過を知らながら、通報しないばかりか、手助けをしている。彼等が通匪行為をしたことは間違いない」「通匪した村を皆殺しにして、見せしめにする」と発言した。

「皆殺しはやり過ぎ」という山下参事官の発言を無視して、大尉は守備隊に連絡をとり平頂山村を監視、村民を一人たりとも村から出さないと命じた。

会議は、前田署長、立田指導官、久保炭砦次長、佟警備局長、夏県長が新たに加わり、続行された。

川上大尉は、兵匪の侵入は平頂山付近村民の責任であるかのような話をした。

「あれほど、郊外各村の村民に、匪賊の情報

をつかんだら、分所に知らせるように通告してあったのに、彼等は報告しないばかりか、大刀匪をかくまった。大刀匪は、そこから現われたのではないか。これらの村は、すべて匪賊に通じている。再度の来襲を防ぐためにも、これらの村をつぶしてしまう必要がある。」

久保炭砦次長の意見は違っていた。

「通匪の事実があったとしても、全員を殺害すべきではない。やるなら、責任者だけにすべきだ。全村民を殺害するようなことになれば、他村の村民は勿論、炭砦の労務者にも動揺をきたし、炭砦の生産にも影響が出よう。軍への支援にも関係してくる。」

久保次長の意見に、川上大尉は不満そうであったが、「撫順の治安は、私が全責任を負っている。反対する者があるなら、今後昨晚のような事件が起こったならば、その者に責任をとってもらう。」と一段と声を張り上げると、皆黙ってしまった。夏宣も「特に意見なし」と答え、平頂山全村民の虐殺が本格的に決まった。

この席で決められたことは、

- (1) 村民の銃殺は、守備隊及び憲兵隊が担当する。
- (2) 後始末には防備隊も応援する。
- (3) 銃殺の現場は平頂山東山腹とする。
- (4) 平頂山村は、焼き払ってしまう。

の4点であったが、具体的行動については、当事者間の打ち合わせ、ということになった。＞

この証言を裏付ける日本側の資料はない。出席していたとされる日本人のすべてが現在すでに逝去している。しかし、「事件」が偶発的に起ったとは考えにくいので、何らかの事前の謀議があったことは確実なようである。炭砦職員の反対は、軍の主張に対して無力であった。それは、飢えたハンターに野鳥の保護を頼むようなものであった。

＜「自衛軍」の進撃線上に、千金堡があり、平頂山の村があった。日本の守備隊は、これら

の村に「匪賊に通じた」という罪名をきせ、虐殺の対象にしたのである。

そのねらいには、二つあった。その一つは「自衛軍」の再度の砦区への襲撃を防止すること、血なまぐさい弾圧を通じて、「一罰百戒」の作用をひき起こし、もし「自衛軍」が再び襲撃して来れば、すぐ通報を義務付け、それが遅れたり彼等をかばうような行為があれば、平頂山のような末路になることを、郊外各村に見せつけようとしたのである。

同時に、「自衛軍」の郊外拠点を奪い取るため、郊外各村の併村工作に利用しようと考えられていた。

他の一つは、「自衛軍」の襲撃によって、日本人10数名の死傷者が出たことに対する報復である。＞

以上も同様に、于慶級の証言である。

井上中尉指揮の1小隊（約40名）が、平頂山村へ向け駐屯地を出発したのが16日午前10時頃、出発にあたり、井上中尉は隊員に、「村民を皆殺しにする」と明確に伝えた。（参加隊員の証言）

撫順憲兵隊通訳、王長春の証言

＜出動した守備隊は、約190名であった。憲兵隊では、出動前に、どのようにして村民を混乱なく虐殺現場に集めるかについて打ち合わせをした。＞

憲兵の小川、鎌田、武田、島峰、亀田、通訳の王と牟文孝そして朝鮮人の金子守一⁽¹⁶⁾の8人で、小川が王と牟の意見を求めた。

牟の発言「平頂山の住民のほとんどは炭砦労務者であるから、彼らを集めようとするなら、大衛門⁽¹⁷⁾で用事がある、とでも言わなければむずかしいだろう。」「昨晚は大刀会が襲撃して来たが、幸い平頂山の住民には一人の負傷者もなかったので、大衛門はみんなの無事を祝って記念写真を撮ることにした。」「みんなにこう

伝えて、大社前に集合させましょう。」

この案に小川はすぐ賛成し、車に分乗して守備隊に向った。憲兵隊の私服組と守備隊からの私服数名が、住民を集めるために先発した。県公署の通訳も同行させられた。おとなしく集まらぬ住民がいる場合のため、武装兵も後に続いた。

川上と小川が車に同乗して出発した。途中、平頂山附近の分所で打ち合せをして、虐殺現場から約500米ほど離れた南側の道路に車を止め、住民が集合し終るのを待った。

午前11時30分頃であった。まず私服が、平頂山の街にはいり、一軒一軒、出てきて集まるように告げてまわった。平頂山は一本の長い通りの村で、数人の私服では短時間に全員を集めることは無理であった。それに気付いた彼らは、あっさりと武力を使うことにしてしまった。4台のトラックに分乗していた武装兵のうち、1台の武装兵が、物凄い剣幕で住民を追いたて始めた。残りの武装兵は村を包囲して嚴重に封鎖し、人の出入を禁じた。そして、残りの1隊が虐殺の準備にかかった。

ちょうど正午時分で、多くの者は昼食の準備をしていた。人々はこの突然の追い出しに非常に驚き、一体どういうことなのか訳がわからず、あちこちで混乱が起きた。

村の北端から村民が追われだした。南はしの住民も異常に気付き、貴重品を身につけたり、なかには布団まで運び出す者もいた。道路は人でいっぱいになった。泣く者、叫ぶ者、もう大変な騒ぎになってしまった。老人や病人、てん足のお婆さんで歩くのが遅いと、銃でなぐられた。こうして、全村民が虐殺現場に追いたてられた。

ただ、馬長順という小商人は、子供が急を告げたので、とっさに綿入れの掛け布団で身をくるみ、家族5人で裏庭の便壺に飛び込んで、難

をまぬがれた。

集められた場所は、平頂山の南のはしで、その西側は断崖になっており、以前砂利を採取していた小山が半分残っており、北側のはしは乳牛飼育場の鉄線でふさがれている、少し傾斜のある平らな草地である。

午後1時過ぎ、村民はここに集められ、ぬきさしならぬはめに陥っていた。

日本の守備隊は、隙間なく包囲していた。それでもなお村民を密集させようとしていた。

東側に黒と赤の布地で覆われた足のついた物が置いてあった。村民達は、あれが写真機で、本当に写真を撮るのだと、思い始めていた。それで、村民達は出来るだけ、家族が一緒になるように、あちこちで呼び合う声が起った。

写真機から、黒い布が取り払われた。突然、誰かが叫んだ。『大変だ。機関銃だ。逃げろ。』日本人将校の手が、さっと振り降ろされるのがみえた。>

王長春は当時撫順憲兵隊の通訳で、この惨殺行に日本側の一員として同行した中国人である。

次に村民生き残りの一人、楊占有の証言を紹介しておく。

<……私は家に帰って、昼食をとろうと思い準備をはじめていた。突然日本兵が現われ「おまえ達の写真を撮るから集まれ」「馬賊が又やってくる。早く避難しろ。」と大声でどなりだした。私は、馬賊と写真が何の関係があるのか、考える暇もなくあわてて飛び出した。何かよくないことが起るような気がしたが隠れようもなかった。そばにいた、二番目の兄が「みんな行くのだから我々もいこう」と言ったので南の方へ向った。私達一家は兄弟が6人で、その家族を合わせると24人だった。四番目の兄、楊占青だけが留守であった。通りは人々の叫びと流れで大混乱であった。日本兵は、足でけったり、

銃床でなぐったりして人々を追いたてていた。隣家のお婆さんが、てん足で歩くのが遅く、銃剣で突きさされるのがみえた。ふり返ると火を付けられた家もあって、黒煙を上げて燃えだしていた。

「これはいったいどうゆうことなんだ？ なぜこのような禍がふりかかって来たんだ？」と兄に小声でたずねた。兄はただ「分らん」と表情で答えた。

私は悪い予感はいしながらも、日本兵が我々に対して集団虐殺をおこなうなんて、夢にも考えなかった。

追いたてられた我々は、日本兵に取り囲まれた。私は、兄弟家族22人と一緒に草地の上にすわった。私の前のあまり遠くない所に、三脚の上に黒い布をかけたものが置いてあった。隣りにすわった人が「あれは写真機だ」と言ったので、ほんとうに写真を撮るのだと思った。

しばらくして、日本兵が写真機の黒い布を取りはらった。

誰かが、金切り声で「大変だ、これは機関銃だぞ。」と叫んだ。

「ダダダダ……」弾が一斉に飛んで来た。それからは、機関銃の音と人間の叫び声とで、大きな爆発でもあったような大混乱になってしまった。

私の妻が最初に倒れた。私も左腕に焼け火箸を刺されたような痛みを感じた。私は、倒れた人の下にもぐり込むようにして、銃弾を避けた。左腕の傷の痛みは、一層ひどくなった。それよりも苦しかったのは、私が弾よけにした死体から流れ出る血が口といわず、鼻といわず、はいり込み呼吸するのもままならなかったことであつた。

家族のものがどうなったのか顧みる余裕はなかった。狂ったような機関銃の掃射がつづいていた。機関銃の音が止み静かになると、あちらこち

らで、うめき声がしだした。しばらくすると日本兵が引き揚げて行くらしい車の音がした。と突然生き残ったものが、その場から逃げ出そうとした。しかし、日本兵は引き揚げてはいなかった。又、機関銃がうなり出し多くの人が倒れた。再び機関銃の音が止んだ時には、誰も動こうとはしなかった。

うめき声がするなかで突然「ギャー」と叫ぶ者があつた。日本兵が死体の上からまだ息のある者を、銃剣や、日本刃で刺し殺し始めたのだ。私はいつ殺されるか分らぬ恐怖と戦いながら、惨劇の終るのをじっと待った。

陽が沈もうとする頃、やっとあたりは静かになった。暗くなると平頂山村が燃え続けているのがよく分った。何時間こうしていたろう。霧雨が降り出した。私は今、その場の状況をどのように説明していいかわからない。

私のそばで2名の女の子が無傷で助かっていた。不思議なことだが、あの混乱のなかでショックのあまり失神していたのが良かったのだろうか。私は一人を抱いて近くの高梁畑まで運び、もどってもう一人を連れ出した。こうして暗闇のなかを、現場から少しずつ離れた。

1ヶ月後、私は家族のうち、姪と甥の一人ずつ助かっているのを知った。又、親戚の趙樹林(㊤『中国の旅』での証言者の一人)も脱出に成功していた。

この時、逃げる事が出来ても途中で死んでしまった者もあり、完全に逃げる事が出来たのは30～40名であったと思う。……>

中国の3名の証言者のうち、于慶級と王長春の二人は、戦後、漢奸として逮捕された。その時の供述調書が証言の基となっている。全文は長い。あちらこちらに記憶違いや、誇張もある。それらを咀嚼し、省略して記述した。

二人の証言を、裏付けることが出来る日本人証

言者は今はいない。ただ虐殺の事前の謀議があったことや、村民狩り出しの段取り等の証言を肯定する資料はいくつかある。

楊占有の証言は他の生き残り村民の証言と大差はない。(生き残り村民の証言者としては他に、趙樹林、韓樹林、夏廷沢、田廷季、李徳貴、方素栄らがいる。)

現場の直接の指揮者が井上中尉であったことは、ほぼ間違いない。(中国側の資料は、指揮者は川上大尉であったと主張しているが、今ここではふれない。)

『大虐殺の真相』(中国側資料)は次のように述べている。

集められた村民の前に機銃3挺が据えられていた。機銃と機銃のあいだには、隙間なく小銃隊がつめていた。

村民に向けて火をふいた機銃は、3挺が正しいと思われる。中国側の資料には6挺と書いているものもあるが、証言者の証言がまちまちで、と断っている。

新しい証言によって、3挺据えられていた機銃の真中の1挺は、重機関銃であったことが分かった。至近距離からの重機の威力がどんなものであったか……。

今、平頂山事件犠牲者の奥フ城と対面する多くのリポーターは、鬼哭啾啾と描写する。そのまま昭和7年に時を捲きもどすと、その場は阿鼻叫喚の地獄絵図となる。

『大虐殺の真相』(中国側資料)は次のように述べている。

前夜の「自衛軍」の撫順襲撃はタイミングといい、襲撃地点の適確さといい、鮮かであった。

「通匪者」がいなければ出来ぬことで、平頂山村が怪しいとにらんだ井上中尉は、16日朝、平頂山村の探索をおこなった。村民の家から、昨夜の混乱にまぎれて盗んだと思われる盗品がぞくぞく出てきた。中尉は「通匪者」と、匿っている「匪賊」を出すように指示したが、村人は言を左右にして応じない。カッとした中尉は、村民を集めて

虐殺してしまった。

今なお日本人間に根強く残る「事件」の発端、経緯についての一説である。

この事件で犠牲となった平頂山村民の数には、諸説があって明確にできない。(小は800、大は3000。)しかし、とにかく平頂山村民の大多数は、ここで死んだ。

「数はわかりません。ひどかったです。『中国の旅』に書かれているとおりでありました。」重機の引きがねを引いた老兵士の証言である。

『大虐殺の真相』(中国側資料)は次のように述べている。

銃殺、刺殺の屍の上に油がかけられ、火がつけられた。この時、まだ息のあった者も多数いたと証言者はいう。そして小山は爆破され、アカシヤの本が植えられ、有刺鉄線を張って隠蔽は終わった。

この間、数日を要している。この作業に動員されたのが、防備隊隊員であり、炭砒職員であった。そのことが、戦後炭砒職員を瀋陽裁判に拘引する口実となった。

平頂山の惨虐はその日のうちに、撫順の住民の耳に達していたと思われる。その後の混乱を『大虐殺の結果』(中国側資料)は次のように書いている。

＜日本侵略軍は、平頂山村だけでは十分でないと考え、郊外20華里以内の村落すべてを焼きつくすことを決め、撫順南方の孤家子の村に向った。しかし炭砒側の必死の反対によって中止された。＞

撫順の街は混乱におちいった。数日するとおかしい現象が現われた。歓楽園、大官屯等の露天市で、それまでは高価で売られていた絹織物、金銀の飾り物、器材や家具等が安値で投げ売りされだしたのである。撫順駅は一日中、黒山のような人の群であった。人々は先を争って、汽車に乗ろうとしていた。旅費の工面の出来ぬ者は、ぞくぞくと徒歩で撫順から逃げ出したので

ある。『撫順にいては一体何をされるか分らない。』『撫順ではいつ殺されるか分らない。』そうつぶやきながら……>

炭砒当局は、予想した混乱が起こったことに困惑した。事態がここまですすんでしまったからには、なんとかして早急に混乱を收拾しなければならなかった。久保孚炭砒次長と夏宣撫順県長の連名で布告が出された。

「平頂山事件は不良の者どもが反満抗日活動をおこない、大刀匪と結託して日本公民を虐殺し、街の秩序を乱したためひき起こされたものである。日本皇軍は、やむをえない状況下で必要な処罰をした。しかし処罰の範囲は平頂山一区域に限る。今後は居住民の安全は守る。

だが二度と匪賊に通ずるようなことがあってはならない。それを守れば、日本皇軍は決して、一人も殺さぬし、虐殺範囲も拡大しない。我々両名は、この地を離れず、各自の生命と財産の安全を守りぬく。」

平頂山生き残りの村民に対し見舞金の配布が公示された。

- (1) 死亡者 5元 受取人は親族に限る。
- (2) 生存者 大人10元、子供20元、孤児30元
- (3) 家屋 10元～20元

しかし受け取りにいった者はいなかった。

この時、撫順の中国人（約4万）の3分の1が撫順を離れたと日本側の資料は記録している。

<炭砒は勿論、附近の村落も多大の損害を蒙り人心復た動揺した。偶々該事件に関し、軍部の処置を誤解し、土民間には深く疑惑を懐くものあり、工人土民にして撫順を去るもの続出し、工人統制上にも支障するに至りたれば、炭砒長の名を以て、布告を発し、数回にわたり事の真相説明をして人心の安定に努めた>（「満洲事変と満鉄」満鉄総務部編）

人々の間で「事件」が語られることはなくなっ

ていった。

平頂山の村民達は、最後の最後まで、なぜ死ねばならぬのか、なぜ殺されねばならぬのか知ることもなく、平頂山の土になっていった。そこに平頂山村民の悲劇があり、恨みが残った。

事件後、中国人の間でひそかにうたわれた詩がある。このような詩がうたわれていたことを知る日本人は少ない。

当年平頂山人烟茂、一場血洗遍地生野草。

棟起一塊磚頭、拾起一根人骨。

日寇殺死我們的父母和同胞，

血海深仇永確消。

本年9月16日夜、私は一人、平頂山村落の跡に立った。「事件」を知ってから、5度めの訪問である。満月に近い月が、槐の林を映しだしていた。秋の夜風を「生ぐさい」と感じた。

そこには「自衛軍」の雄叫びも、日本軍の機銃の音も、村民の悲痛な叫びも、今はまったく聴こえない。

「決して忘れません。」

胸のなかでつぶやくよりほかに、犠牲者におくる銭けの言葉を私は知らない。

昭和7年11月28日、「満洲国」から一通の電報がうたれた。在満洲国武藤大使からの、内田外務大臣宛、第326号（暗）電である。

<「撫順市外における匪賊との交戦事件の真相について」

「本夏高粱繁茂期ニ入ルヤ瀋海鉄道沿線各地ニ匪賊出没シ、村落ノ掠奪ヲ行ヒ良民ヲ苦メ居タルカ、9月15日夜約2000ノ兵匪及不良民ハ撫順市外ヲ襲撃シ、且各所ニ放火セルノミナラス、我独立守備隊ヲ襲ヘリ。之等兵匪及不良ノ徒ハ千金堡及栗家溝ヲ根拠トセルヲ以テ、井上中尉ノ率ユルー小隊ハ、16日午後1時、千金堡ニ至リ部落ノ搜索ニ着手セル処、却テ匪賊ノ発砲ヲ

受ケ、我軍ハ自衛上迫撃砲ヲ以テ之ニ応戦セリ。交戦約30分後村落ノ掃蕩ヲ終ヘタルカ、村落ハ交戦中発火シ大半焼失シヌ。匪賊及不良民約350名仆レタリ。

右ハ支那側カ大袈裟ニ宣伝スルカ如キ多数無辜ノ民ニ対スル残虐行為ニ非ス。我軍ノ自衛処置ニ過キス。

尚事件後、軍側ニ於テハ奉天省当局ト連絡、罹災民ニハ手厚キ救済ヲ為スト共ニ部落ノ復興其ノ他ノ善後処置ヲ尽シ、事件ハ無事ニ落着セルモノナリ」>

「事件」に関する唯一つ現存する公文書である。井上中尉が指揮者であったことを除いて、この文書はまったくの創作である。この作為が撫順の守備隊でなされたものか、上級機関でのものかは分からない。発信者の武藤大使とは、関東軍司令官武藤信義大将のことである。

この「撫順事件」を、最初に満洲国外に打電したのは、インターナショナル・ニュースのハンター奉天特派員だそうだが、結局取り上げられなかったという。

ついで、ロイター通信が、南京政府の発表をロンドンに送っているが、ロイター本社もなぜか、この「ニュース」を配電することなく「スクラップ」にしている。

ジュネーブで中国代表顧維鈞によって「撫順事件」が持ち出されたのは、11月24日午後の理事会においてであった。

松岡代表は「真相を知らざるにつき、判明次第、必要なら書面で回答する」と答え、本国外務省に照会電報を発している。

前掲の武藤電報はその返電である。

当時、上海に在った各国通信社は「撫順大虐殺」と題した中国政府の発表を、中国政府のデマと断ずる者が多く、「デイリー・ニュース」は<外交部ノ発表ハ何等信憑スヘキ証拠ヲ挙げ居ラス、コノ種宣伝ハ顧全権ノ立場ヲ困難ニスル>と記事に

した。

「下手な言い訳けをゴジャゴジャするより、外国通信社も中国政府の発表は、何の証拠もないと論評しているのだから、あくまで事実無根として突張ねてしまえ」

少々乱暴な書き方ではあるが、乱暴なのは事件を「事実無根」としてもみ消そうとする「発想」のほうであろう。

上海、有吉公使から内田外務大臣宛に出された意見具申である。昭和7年11月28日のことであった。

それ以後「平頂山事件」は、公式の場ではその姿を消した。

戦後、昭和7年当時奉天駐在領事であった森島守人は、「平頂山事件」を振り返って、次のように述懐している。

「なるべくこの種の事柄は、闇から闇に葬ろうと考えていた当時の心境を考え、慚愧の至りに堪えない、こんな考え方が結局日本を毒したものであった。」>

まったくそのとおりで、「事件」の究明があの時おこなわれ、軍のゆき過ぎであったとしても、隠蔽などせずそれなりの処理がなされていれば、日中戦争へと続くその後の惨虐行為もあるいはある程度防げたかもしれない。

昭和58年8月、私は、この調査を手伝ってくれている宮脇君と二人、北京図書館新聞閲覧室にいた。森島守人のいくつかの証言を裏付けるため、当時の中国有力紙によってこれを確認するためであった。これは、北京図書館参考研究部、邢女史の好意で実現した。

室内の水銀柱は38度を示していた。この暑さのなかで、扇風機なしで汗ひとつかかず、熱心に資料ととりくむ中国青年の姿にまず感心させられたが、日中戦争、解放戦争と混乱が続いた中国で、50年も前の新聞がきちんと保存され整理されてお

り、この分野での水準の高さに驚嘆した。

＜撫順日軍屠村情形＞

＜北平政委会着手調査＞

と事件を報ずる『上海新聞報』（1932年11月3日付）の記事によって、一つの裏付けがとれた。「この時、どのような思いでこの記事の活字をひろったのだろう。」中国人文選工の胸中を想い、感慨をおぼえた。

平頂山の惨劇⁽¹⁸⁾は、事前の謀議の有無やその内容、日本の守備隊の行動など、なお検討の余地がある。軍は、何を意図して平頂山に向ったのだろう。純粹に警備上の目的だけなら、事後処理にあれ程、力を注がねばならぬような事態にしたのでは、「ヘマ」としか言いようがない。報復を目的とした作戦は、感情に左右され失敗することが多い、と軍指導部は厳に戒めている。ただ現地指揮官の勇み足であったのか、わからぬことが、肝心な部分で残っている。

「撫順を陥すまでは一步も退かぬ」と豪語して、2000の兵力と共に10月始めまで、撫順周辺を動かなかった李春潤が、撫順への再度の襲撃を断念したのが、平頂山での「見せしめ」によるとするなら、日本側守備陣にとって、大きな「効果」があったことになる。

昭和7年3月に公布された「満洲國人權保障法」は、＜全人民ニ対シテ誓約ス＞と前文に書き、＜第1条 満洲國人民ハ身体ノ自由ヲ侵害セラレルコトナシ、公ノ権力ニ拠ル制限ハ法律ノ定ムル所ニ依ル＞と規定している。

「平頂山事件」は、この条文が全くの空文であり、銃剣が法であったことを証明している。

あとがき

野間、宇野両氏のご斡旋で、本誌の貴重なページを提供していただきました。感謝しております。

私は、文筆とはまったくかけ離れた分野におり

ますので、執筆に先だつ時間と紙数の制限に戸惑いました。資料の見直しに追われましたし、どう構成して、「事件」のどの部分に主眼をおけば、より理解してもらえるのか、まったく分からぬままに書きすすめました。

結果は、非力で、「羞愧」の一語につきます。

この「事件」について、日本で書かれたものの多くは、（引用の記事まで含めると相当な数になります）憶測、伝聞（それも誤伝）によるものが目立ちます。

私は、どんな些細なことでも、「事件」に関係あるものは、この目で見、足で資料を集めました。真剣に取りくんだと自負しています。私は、昭和7年生れなので、「事件」当時の撫順の雰囲気は直接は知りません。ただ、撫順に住んだことのある者として、この「事件」に人一倍の関心を持ちました。調べていくうち、ぬけられない深みにはまってしまいました。

この「事件」は、私達に多くの教訓を与えてくれます。それだけに、いい加減に書かれたもの、特に日本で、自己の立場を主張するために利用するような書き方をするものに対しては、許せぬ思いがします。

まだまだ真相を解明するのに必要な資料が隠れているように思われます。それらが明らかになった時には、あらためて筆をとり書き残しておきたい。そう希って資料の発掘を続けております。

最後になりましたが、今までに坂口遼、庵谷盤両大先輩を始め、満鉄会、撫順会の多くの方々に資料の提供、証言、助言をいただいております。お礼申し上げます。

〔注〕

(1) 瀋陽裁判

昭和23年4月、国民政府主席東北行轅審判戦犯軍事法廷は、久保孚・山下満男・金山弓雄・満多野仁平・西山茂作・藤沢末吉・坂本春吉の

7名に、平頂山村村民の虐殺を共同で謀議し実行した、として死刑の判決を下し執行した。坂本春吉は警察官、他の6名は撫順炭砒職員であってこのなかに軍関係者は一人もいない。

戦後、日本人の帰国開始直前現地紙が「血債を清算するまで日本人を還すな」と報道し、世論をかきたてた。その結果、逮捕された日本人は、100名を越えたという。当時、「事件」の軍関係者は、すでに撫順にはおらず、7名は身代りに処刑されたとする風説が強い。

20年8月15日、撫順守備隊の原田大佐が自決しているが、事件とは直接関係はない。

この裁判は、B・C級戦犯裁判に共通する問題を含んでいる。

現在までの調査でも上記の7名は、「冤罪であった可能性が強い」ように思われる。

(2) 匪賊

元来、満洲（現在の中国東北地区）には、戦前、武力による略奪を生活の手段とする集団（馬賊、土匪等）があり、これらを一般に匪賊と称していた。現代史の定説になっているように、満洲事変の前と後とではその性格は一変する。

各所に蜂起した旧学良軍は、これらの土匪を含め抗日戦を展開した。（事変直後、その数36万）旧学良軍（遼寧民衆自衛軍等）崩壊後は、中国共産党の主導による東北抗日連合軍が反満抗日の戦いを続けた。

これらの政治的蜂起者をも含めて、当時一般に「匪賊」と呼称していた。

(3) 東辺道（満洲国東南部）

狭義には通化省8県を指し、広義には隣接安東省の2県、吉林省の3県、間島省の数県を加え、九州・四国の両地を合わせた面積の大きさの地域を指している。（満洲国史）

昭和7年当時は、安奉線の東、瀋海線以南の一带の地域、輝南、金川、海龍、清原、新賓、撫順、本溪、鳳城、安東、寛甸、桓仁、輯安、

通化、臨江の14県を含むと理解されていた。

当時、東辺道は「匪賊」の巢窟と言われ、昭和7年5月の第1次討伐から7年11月の第3次討伐までの3度の討伐戦で、唐聚伍軍2万を「掃蕩」することに成功するが、抗日連合軍第1路総司令楊靖宇（『もうひとつの満洲』澤地久枝、参照）が、昭和15年2月日本軍の「討伐」に斃れるまで、この地域はその活躍の場であった。

(4) 独立歩兵第2大隊第2中隊

当時、満洲に在った独立守備隊は、6ヶ大隊で編成され、第2大隊は奉天に駐屯しており、その第2中隊が撫順に分遣されていた。昭和6年9月18日の柳条湖事件で主役を演じたのは、この第2大隊であった。勿論第2中隊も急きょ、北大營の攻撃に参加している。

(5) 唐聚伍

奉天、講武堂を卒業。満洲事変当時張学良軍中佐、満洲国建国直後、安東省桓仁県で挙兵、通化を占領。日本軍の第2次東辺道討伐（昭和7年10月）までの半年間、抗日運動の一方の旗頭であった。

(6) 王鳳閣

事変前、通化県警務局長。大刀会総法師として遼寧民衆自衛軍の中核をなした。大刀会は紅槍会とともに農民の、いわゆる「匪賊」に対する自衛手段的役割をしていた。事変後、中国の国共両勢力とも手をつなぎ、抗日運動の前衛的存在であった。農民を主体としたこれらの大刀会や紅槍会の兵士は、命を捨てることを厭わず、その果敢な襲撃は日本軍守備隊を悩ましつづけた。昭和12年3月、日本軍により逮捕されるまで、抗日運動の中心人物の一人であった。

(7) 李春潤

興京駐屯歩兵第1団第3営長。昭和7年4月反乱して自衛軍に合流した。

(8) 王彫軒

事変前、新賓県で小学校の校長をしていたといい、彼の教え子が多数彼を慕って抗日運動に参加した。

彼の不自由な身体から、「王拽子」と愛称されていた。日本官憲の追及の危機を農民に救われたこともたびたびあったという。

(9) 梁錫夫

山東省出身の農民で、柳河地方の大刀会首領であった。撫順襲撃時には彼の率いる遼寧民衆自衛軍第11路第31, 32, 33団が襲撃に成功している。

(10) 川上大尉

事件当時の撫順守備隊隊長。川上大尉は一度だけ現代史のなかで顔を出している。昭和6年9月14日、関係者を集めて守備隊が出動して留守の場合の警備の打ち合わせをおこなっているが、その時「9月18日あたりが最もおもしろみがある。」と事変勃発を示唆した。この情報が、満鉄本社及び奉天総領事を通じて外務省に打電された。「満洲事変」関東軍謀略説を裏付ける事実として、後々まで問題となった。

平頂山事件当日は川上大尉は撫順にはいなかったとする説が撫順の日本人の間では根づよい。しかし情報によって、撫順が襲撃されることは確実だと言われた日に、守備隊長みずから他に出動していたのなら、よほどのことでなければならぬ。それを裏付ける資料はない。事件前後の大尉の動きについてはかなり多くの資料が残っている。完璧といってよいほど整っている資料のなかで、16日の資料だけが欠落していることはかえって作為を感じさせる。これも今後、埋めねばならない空白の一つである。

中国では、川上大尉主謀説を採っている。

(11) 井上中尉

千代子夫人自刃の経緯については、澤地久枝『昭和史のおんな』に詳しい。

井上中尉が参加した錦州攻略戦は、学良軍の

無抵抗撤退もあって、7年1月にあっさり終わってしまった。所属する第4師団は内地に引き揚げたが、中尉は満洲に残った。

これは夫人の自刃事件と関係があるものと推察される。

そして配属されたのが、撫順守備隊であった。中尉の錦州での所属は衛生隊であったから、第一線の戦闘に参加することはなかった。撫順では、「事件」直前までの「討伐」出動回数は、他の将校に比して、群を抜いて多い。

「手柄をたてねば……」の意識が中尉の胸中に常にあったとするなら、中尉の赴く所、大きな不幸が起る素地があったと思われる。

敗戦時中佐。44年8月逝去するまで、「事件」については一切語らなかった。

(12) 久保 孚

昭和7年の「事件」当時の撫順炭砒次長である。防備隊員の多くが、炭砒職員であったことから、瀋陽裁判に連座することになったものと思われる。中国側資料によっても最後まで軍の行動に反対した一人とされている。しかしそれは、大河の奔流を一人でせき止めようとする空しい努力であった。自己の無罪を信じながらも、判決が死刑となるや自から先に立って刑場に向ったという。一片の遺書も残さず、「ここを撃て」が最期の言葉であったという。

中国側は、通常ではありえない遺骨の引き取りを許している。

(13) 「自衛軍」の襲撃

「自衛軍」は撫順を2000の兵力で三方から囲む形で対峙していながら、結局、同時襲撃ができなかった。東部には、日本軍主力がおり、山砲の威嚇射撃のため前進できず、西部では、道案内者が途中で逃げ出して混乱し、わずかな一部の兵力で鉄道を破壊したにすぎない。

中国側の資料はく「自衛軍」の撫順侵攻は失敗であったが、日本侵略軍に重大な警告を与え、

中国人民の不撓不屈の精神を示すことには成功した。＞と総括している。

(14) 楊占有

事件当時の平頂山村村民生き残りの一人、熱河省出身、当時36歳。

(15) 于慶級

撫順県外事秘書兼通訳。

(16) 金子守一

昭和23年1月、瀋陽戦犯裁判で死刑の判決を受け、処刑された。

(17) 大衛門

「事件」当時、撫順炭砒には、古城子採炭所をはじめ6ヶ所の代表的な採炭所があった。それらを統轄する炭砒事務所が新市街にあった(建物は現存)。その事務所を撫順の中国人は大衛門と呼んでいた。

(18) 平頂山の惨劇

諸説を整理してみると、

「撫順襲撃」

A 襲撃したのは、「自衛軍」。

B 単なる物盗りのしわざ。

「平頂山村の惨劇」

a 撫順防備陣総意での実行。

b 守備隊長だけの意志。

c 出動した小隊が起こした偶発事件。

d 残虐行為はなく、もともとその場所は死体捨て場であった。

e 残虐行為は日本軍ではなく、襲撃した「匪賊」である。

A + b, A + c, A + d, A + e, B + c, 以上の組合せで事件を組立てるのが、「まぼろし派」といわれる人達を書く「平頂山事件」である。

中国側の資料からも、日本にある資料、証言からも「B」説は考えられない。同じ理由で「d」と「e」も消してよい。

残る組合せは、「A + a」「A + b」「A +

c」の各説である。

中国が現在までに解明した「事件」の真相は「A + a」説である。このレポートも、ほぼその線をとっている。しかし、この説のなかにも不明確な点がいくつかある。一番重要な点は、謀議参加者の主役川上大尉撫順不在説である。これを証拠をあげて打ち消さねばならない。

また、出席していたとされる山下県参事官(山下満男が県参事官になるのは、翌8年以後であり、事件当時は東郷坑労務担当者であった)の説も解明しなければならない。

「A + b」、ここでも川上大尉の動向が問題になる。大尉が撫順にいたとして、大尉の判断だけで井上中尉に平頂山村の攻撃を命じる可能性があったのであろうか。

撫順では、通常、毎週一回防備会議が開かれていた。出席者は撫順炭砒、守備隊、憲兵隊、警察、消防、撫順駅、撫順県公署の各代表者である。大きな動きがある時には、定例以外に随時開かれている。特に撫順炭砒では、炭砒職員を防備隊隊員として650名を動員していた。守備隊隊員200名と合体行動させていたので、守備隊だけの意志で行動を起こすことは考えにくい。

それまでの前例から考えても、その日の守備陣の動きは、関係者の間で打ち合せがあった、と考えるほうが真実に近いと思われる。それからすると、この説も弱い。

「A + c」、これは一見ありそうな推理ではあるが、偶発事件だとすると、村民を虐殺現場に、それほど混乱なくなぜ集めることができたのかうなづけない。

やはり、「A + a」説に、落ちつくことになる。なお、資料の発掘を続けたい。

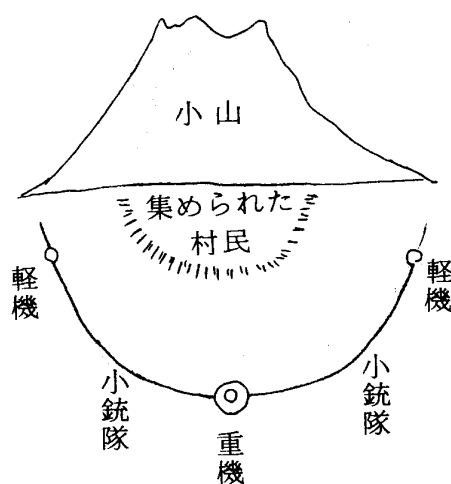
〔参考文献〕

平頂山大屠殺惨案始末 政協撫順市委員会文史

虎口余生	辦公室	楊 占 有
日本侵華図片史料集	新華出版社	
外交文書（満洲事変）	外 務 省	
満洲に於ける義勇軍		
の概況	陸軍省調査班	
満洲事変と満鉄	満 鉄	
現代史資料第7巻及		
第11巻	みすず書房	
満洲国史（総論及	満洲国史編纂刊行会	
各論）		
満洲国各県視察報告	大同学院	
満鉄社員会報	満鉄社員会機関誌「協	
	和」か	

敗戦地獄 撫順	山下 貞
撫順炭鉱終戦の記	満鉄東京撫順会
満洲の獄窓に祈る	奉天極友会
中国の旅	本 多 勝 一
もうひとつの満洲	澤 地 久 枝
昭和史のおんな	澤 地 久 枝
「平頂山」特別弁議人	葛 西 純 一
世界と日本（No. 452）	内外ニュース
「陰謀・暗殺・軍刀」	森 島 守 人
「満洲共産匪の研究」	満洲国政府治安部参謀
	司
「わが半生」	愛新覚羅・溥儀
満洲日報，上海電報，他数紙等。	

平頂山事件の舞台
(襲撃に参加した兵士の書いた見取り図)



平頂山事件の舞台
(「中国の旅」による)

